

# 泥のモスクはだれのもの

伊東 未来  
大阪大学大学院博士後期課程

## 「泥の町」ジェンネ

西アフリカの大陸部に、「泥の町」がある。アフリカ第三の大河ニジェール河の支流に囲まれた、マリ共和国のジェンネという古都だ。一平方キロメートルに満たない小さな町に、およそ一万四〇〇〇人の人びとが暮らしている。わたしはこの町に二年間暮らし、人類学の調査をおこなった。

ジェンネが「泥の町」とよばれるゆえんは、特有の建築にある。町のすべての建物が泥でできているのだ。正確にいうと、泥を乾かしてつくった日干しレンガを積み重ね、その表面を泥で化粧塗りした建築である。

## 町の人びと自慢の大モスク

ジェンネは一五世紀ごろから、西アフリカの中心的なイスラーム学術都市のひとつとして重要な役割をになってきた。ジェンネの町の中心には、大モスクが建っている。縦横およそ七五メートル、高さ二〇メートル。世界最大の泥の建築物だ。町で唯一のこの大モスク

登り、泥を塗り始める。子どもから大人まで、歓声をあげる。巨大なモスクの外壁、内壁、屋上すべての化粧なおしだが、およそ半日の早さで完了する。

モスクの壁にはりついて全身で泥を塗りなおす若い人びとの姿は、いつも町を見守ってくれるお母さんに甘える子どものようなものだ。それを見つめる年長者のまなざしもとても満足げ。人びとの信仰の深さとモスクへの愛着を強く感じる、すてきな祭りである。

## ジェンネつ子のモスク／世界全体の遺産

このように、住民総出で毎年盛大におこなわれてきたモスクの化粧なおしだが、二〇〇九年の様相はすこし違っていった。あきらかに盛りあがりには欠けたのだ。直前まで、今年はやらないほうがよいという意見も強く、当日に参加

クは、ジェンネ・ボロ（ジェンネつ子）の誇りである。人びとはことあるごとに、じぶんたちのモスクの壮麗さを自慢する。

ジェンネの建物を包んでいる泥の化粧塗りは、雨季のはげしい雨で少しずつ流されてしまう。そのため、雨季のまえには建物の化粧塗りをしなおす必要がある。巨大なモスクも例外ではない。大モスクは毎年、住民総出で化粧なおしをされる。これは町の人びとにとって一年でいちばんにぎやかな祭りであり、礼拝をおこなう大切な場を町の皆で守っていく、厳かなおこないでもある。

## 大モスクの化粧なおし

炎天下に高所でおこなう化粧なおしは体力勝負の作業。祭りの実働部隊の中心は、一〇代をボイコットする人も目立った。これは、二〇〇八年末に着工された、外部団体によるモスク改修プロジェクトの影響である。

いたみが目立ってきたジェンネのモスクを改修しようとして、行政の側が外国の支援団体に依頼し、改修プロジェクトがはじまった。住民はじぶんたちのモスクが若返るのはうれしいと考えながらも、「よそ者」である首都の役人や外国人がとりしきる改修プロジェクトの進めかたには、強い不満をいだいていた。二〇〇六年九月にはこれに関連した暴動もおき、逮捕者やけが人も多数でたという。ふだんの、静かどころかツンと澄ました古都の風情ただようジェンネからは、なかなか想像ができない事態だ。

ジェンネのモスクは、町の人びとがそこで祈り、それを守り、またその存在に守られてきた、「ジェンネつ子の」モスクだった。しかし、

外部の支援組織による改修プロジェクトは、モスク＝世界遺産という認識のもとでおこなわれていた。つまりモスクは、「国境を越え今日に生きる世界のすべての人びとが共有し、次の世代に受け継いでいくべき」世界全体の遺産として扱われているのだ。

盛りあがりに欠ける化粧なおしを、モスク前の広場からながめていた。わたしの隣で、今は引退した泥大工のおじい



モスクの化粧なおしのようす（2007年4月）

から三〇代前半の若い男性だ。同年代の女性は、塗りなおすための泥が乾かないよう、川からバケツで水を運ぶ。年長者は、祭りが無事におこなわれるよう見守り、若者を監督する。当日、祭りは日の出とともに始まる。まだ薄暗いなか、泥大工の最年長者が、メッカの方向を向いたキブラ壁に最初のひと塗りをする。それを合図に、若者がいっせいにモスクに駆け



毎週月曜日にモスク前の広場でひらかれる定期市（2008年1月）

さんが、ぼそつと言った。「次の年、その次の年、はたしてわたしたちは、じぶんたちのモスクの化粧なおしを、じぶんたちの手でできるのだろうか。モスクがだんだんと、よそ者のものになっていくようだね。」

今後この改修プロジェクトが終われば、ジェンネのモスクはまたジェンネつ子の手に戻るのだろうか。それとも、このままほとんど、「世界遺産になって」いくのだろうか。

男の子は10歳くらいになると化粧なおしに参加するようになる（2007年4月）

